

いのち
生命のにぎわい調査団
生命のにぎわい通信

発行：千葉県環境生活部自然保護課
千葉県生物多様性センター
〒260-8682 千葉市中央区青葉町955-2
(千葉県立中央博物館内)
TEL 043-265-3601 FAX 043-265-3615
URL <https://www.bdcchiba.jp/monitor/>
E-mail monitor@bdcchiba.jp

第60号：発行 令和3年(2021年)9月

生命のにぎわい写真：生き物たちの食う一食われる編

私たちが自然界で見る生き物は、他の生き物を食べることで生存し、子孫を残していきます。しかし、どのような生き物が、どのような生き物を食べているのか、あまり知られていないように感じます。今号では団員からご投稿いただいた写真の中から、食う一食われるの関係（特に普通種）を捉えた貴重な写真を紹介します。写真左上は撮影者の団員番号です。



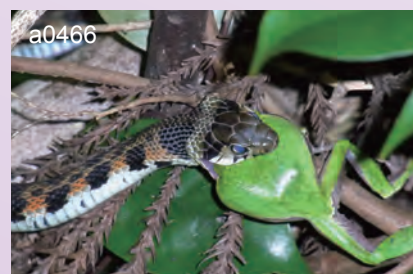
クサガメ^{くわ}を啜るタヌキ

タヌキがクサガメの捕食者であることを示唆する貴重な写真です。このまま甲羅を噛み砕いたのか、食べるのを諦めて逃がしたのか、気になるところです。



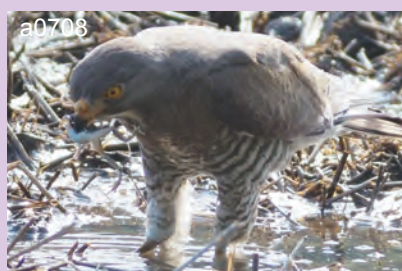
ウシガエルを突き刺すアオサギ

アオサギがウシガエルの有力な捕食者であることを示唆する写真です。この後ウシガエルを呑み込んだようで、外来種の防除に役買ってくれるかもしれません。



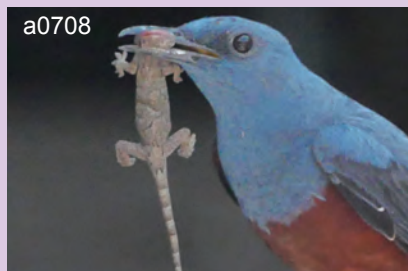
カエルを捕食するヤマカガシ

ヤマカガシはカエル類を好み、有毒なヒキガエルをも捕食します。体内には2種類の毒があり、内1つは捕食したヒキガエルの毒を取り込むことで作られます。



アカガエル^{くわ}を啜るサシバ

サシバは小型哺乳類、爬虫両生類や昆虫類等を好んで捕食します。そのため、営巣と採餌場所になる森林と水田がセットとなった里山を主な生息地としています。



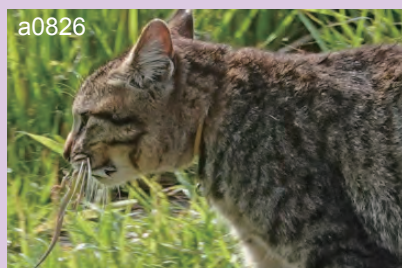
ヤモリ^{くわ}を啜るイソヒヨドリ

イソヒヨドリの親鳥は雛のために甲虫、イモムシやバッタ類を運んでくることが多いですが、稀にヤモリやカナヘビ等のトカゲ類を運んでくることがあります。



カミキリを捕食するトビズムカデ

ムカデは昆虫やミミズ等を捕食する肉食性の生き物です。トビズムカデはカミキリ等の身体の堅い甲虫にも襲いかかり、捕食してしまうようです。



ニホンカナヘビ^{くわ}を啜るイエネコ

イエネコがカナヘビを捕獲した瞬間です。ネコはとても可愛いですが、実は外来種として様々な在来種を捕食しています。逃げ足の速いカナヘビも、ネコには敵わなかったようです。



トンボを捕食するシオカラトンボ

身近に見られるシオカラトンボですが、実は悍猛なハンターです。ハエ等の小さな昆虫だけでなく、ナツアカネ等の大きな昆虫を捕食してしまうことがあります。



魚の死骸を摂食するアカミミガメ

北米原産の外来種ミシシippアカミミガメは魚の死骸を摂食します。動植物や農作物を食害する侵略性がある一方で、実はお掃除屋さんとしての一面もあります。

* 食う一食われるの関係を分かりやすくするために、一部の写真ではトリミングを行いました。

最新の生物多様性に関する情報、各種研修会の情報は、当センターと調査団のホームページをご覧ください
「調査団」 <https://www.bdcchiba.jp/monitor/index.html> と 「生物多様性センター」 <https://www.bdcchiba.jp/>

古典文学と里山の生き物たちの世界



第十四回 アオダイショウ

Elaphe climacophora 有鱗目ナミヘビ科

詩人 大島 健夫

日本の古典文学には、様々な生き物たちが様々な形で登場します。かつてこの国の人々はどのように生き物とかかわり、その姿に何を見ていたのでしょうか。この連載では、生物多様性センターに勤務している、ポエトリー・スラム W 杯日本代表詩人の大島健夫が、生命のにぎわい調査団の皆様を過去の世界にご案内します。

ヘビが苦手な人は昔から多かったとみえて、古典文学におけるヘビは、常にマイナスのイメージにおおわれています。ヘビといえどとにかく執念深く、超自然的な力を持っていて、男性に変化する時には女性を、女性に変化する時には男性をたぶらかして時には命さえも奪い、最後にはもっと力のあるものに退治される、という姿で描かれることが一般的です。江戸時代後期に著された日本の怪異文学の代表『雨月物語』の中でも屈指の恐ろしさを誇る中編、『蛇性の姪』などはその典型でしょう。

しかし、時として、ヘビは善なるものの使いとして描かれることもあります。鎌倉時代初期に成立した説話文学の傑作『宇治拾遺物語』の巻第六には、まさにそんな話が収録されています。

話は、鷹匠の男が鷹の雛をとり山に行き、誤って谷に落ちるところから始まります。幸い、途中で木の枝に引っかかって止まったのですが、崖が急すぎて這い上ることもできません。男は小さい頃から観音経を読む習慣があったので、この時もひとり観音経をととなえていると、崖の下から巨大なヘビが姿を現すのです。その長さはざっと二丈。つまり 6m の大蛇です。

身動きもできないまま、男は喰い殺される覚悟を決めますが、ヘビは男を喰おうとはせず、そのまま崖を上ってゆきます。このヘビにくっついてゆけば助かるかもしれない、とひらめいた男は、ヘビの背中に刀を突きたててしがみつきます。ヘビは男を背中に乗せてすると崖を上りきり、助かった男は刀を抜こうとしますが抜けません。男の刀を背中に立てたまま、ヘビは向かいの谷へと去ってしまいます。家に帰った男は、感謝を込めていつものように観音経を読もうとしますが、経典を取り出すと、なんとその経典に男の刀が刺さっています。男を救ったのは、ヘビに姿を変えた経文だったのです・・・。

さて、お経が姿を変えたこのヘビの種類が気になるところです。本州最大のヘビといえばアオダイショウです。アオダイショウは樹木や急峻な斜面を上るのが得意で、谷に渡した電線を渡った例もあるそうですから、生態的にもビングゴです。今でも 2m 近いのはたまにいますが、自然が豊かで生物量の多かった昔はもう少し大きいのもいたのかもしれませんが。山仕事をする人の横を大きなアオダイショウが這っていった、というようなことも、それほど珍しいことではなかったのではないのでしょうか。



画 齋藤倫瑠

＜これからの季節に観察できる生きもの＞

○調査対象種: ミヤコドリ、オオバン、モズ、リンドウ、イチヨウ(黄葉)、イロハモミジ(紅葉)など

○調査対象種以外

- * 渡りのシギ・チドリ類、両生類、爬虫類など
- * 各種昆虫(特にバッタ、コオロギ、カマキリ)
- * 希少生物(生息地・生息数が減少している生物)、外来生物の報告も受け付けています。

調査対象種以外は種の同定が難しいため、できるだけ写真の添付をお願いします。

「生命のにぎわい調査団 現地研修会」のご案内 房総丘陵で植物や生きものを観察しよう！

いちばらクオードの森で秋を彩る植物や昆虫、タゴガエル等の両棲類、川の生きものを観察し、房総丘陵の魅力を研修します。

- 開催日(どちらか一日、お好きな日を選んでください)(**荒天中止**)
 - ①令和3年10月27日(水) 10時40分～13時30分(予定)
 - ②令和3年10月30日(土) 10時40分～13時30分(予定)
- 定員: 10月27日(水)は20名、10月30日(土)は40名(申込多数の場合は抽選)。小学生以下が参加する場合は保護者同伴。
- 申込締切: 令和3年10月15日(金)必着(郵送またはFAX)
- 詳細は申込案内書をご覧ください。

* 本研修会実施の可否は、新型コロナウイルスの状況を見ながら判断します。